〔朝野群載二十一雜文〕勘申

御蛭飡吉日

今月廿六日己卯　人神在胸中　來月十二日甲午　人神在左乳

右御蛭飡吉日、勘申如件、

康平四年四月廿四日　　權醫博士和氣相秀

〔運歩色葉集〕温石（ランジヤク）　温石（ランジヤク）　出羽　温石（ランジヤク）

〔毛吹草〕美濃

〔大和本草三金玉土石〕温石

温石

山東通志曰、出掖縣色兼青白、潤膩如玉、味甘無毒、可備藥物、日本ニ温石ト云物アリ、白クシテ少青シ、ヤハラカナリ、是山東通志ニシルセル中華ノ温石ト同物ナルベシ、多ハ弓ノ弦折レ易シ、温石ノ末ヲ指ニツケ、弦ヲシゴクニ柔韌ナル事夏月ノ如シ、是温石ノ性熱ナル事可知、他石ノ末ヲ用レバ不然、温石燒テ鹽水ヲソヽギ、布ニ包ミ痛處ヲ熨スニ尤ヨシ、又腹中ノ積滯ヲ散ズ、燒テ温熱ヲトランタメニハ、他ノ堅石モ可也、サレドモ、温石ノヨキハシカラズ、本草綱目ニ温石ヲノセズ、然レドモ古磚ヲヤク事アリ、是亦温石ナリ、證類本草云、久患下部冷久痢腹傷下白膿燒塼并温石熨及坐之並瘥、但取堅石燒暖用之、非別有温石也、今按、諸本草ニ、日本所産ノ温石ヲ不載、

〔紀伊續風土記物産一温石天文本和名鈔云、温石温音如運、康賴本草に滑石、和名御之也、久とあるはうけがたし、〕

延喜式諸國貢藥中に、紀伊國温石、一百二十斤とあり、今名草郡天野莊藤白峠の産上品なり、那賀郡小倉莊上三毛村の産下品なり、一説に、温石に熨病の用あり、服餌の方なし、本草和名に滑石出紀伊國とあるをみれば、温は滑の誤なるべしといへり、按ずるに、漢土にて温石といふは、一石の名にあらず、唐陳藏器本草拾遺に、久患下部冷久痢腸腹下白膿燒塼并温石熨及坐之並差、但取堅石燒暖用之非別有温石也といへり、又本草和名に、温石今燒火熨人腰脚者也といへるも、拾遺の温石を引るなり、是に據てみれば、温は滑の誤といふ説可なるに似たり、然れども本國にて滑石の産する所いまだ詳ならず、温石は今に多く産して、式に載